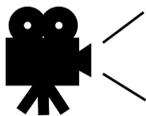




2012年
会報 秋号
No.36

目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。



ごあいさつ

シティ・ライツ代表 平塚千穂子

今年は、異常な暑さが続きましたが、ようやく秋が訪れて、だんだん涼しくなってきましたね。皆さん、いかがお過ごしでしたか？体調を崩された方も、いらっしゃると思いますが、体の不調で

気が滅入ったりしても、心にだけは翼をつけて、明るく自由に羽ばたかせていたいものです。

さて、そんな秋の夜長に、尖閣諸島のニュースを見ていて、マインドコントロールは恐ろしい。などと考えていたら、「言葉のもつ魔力」について思考がめぐり、止まらなくなってしまいました。今さらですが、「視覚障がい者」という言葉や、「晴眼者」「健常者」という言葉。改めてよく考えると、しっくりこないものだなあと。「視覚障がい者」という言葉は、「がい」の字を、公害の「害」ではなく、石へんに損得の得の右っ側をくつつけた、「碍」という字を当てるのが本来だった。という話は、よく聴きますが、この石へんの「碍」の字は、大きな岩を前にして、人が思索し悩んでいる様子。つまり、人が困った状態に直面している様子を表す漢字なのだということで、害虫の「害」よりはよっぽどいいと思い、シティ・ライツでは設立当初から、ホームページや配布物等に「視覚障害者」と書く時は、石へんの「碍」の字を使ってきました。でも、「テキストリーダーが石へんの碍だと、「がい」とは読まないだよね。」とか、「見た事もない漢字ですが、何と読むのですか？」と聞かれることも多くて、最近ではメールなどを書く時には、一般的な公害の「害」の字を使って、「視覚障害者」と書いてしまうことや「がい」の部分だけひらがなにすることが多いです。ちなみに、新聞社などのメディアでは、「がい」の部分も、ひらがな表記に統一しているそうです。

しかし、漢字うんぬんという以前に、「視覚障がい者」という、その言い方自体を変えようという発想はなかったのか？英語では、「ブラインドピープル」ですが、ブラインドは「目隠し」という意味。日本では、「視覚障がい者」以外には、「めくら」にはじまり、「盲人」「目の不自由な人」「見えない人」など、いろいろな言い方がありますが、「めくら」を差別用語としつつ、「目が～ない」という方向性は、英語にしても日本語にしても、全く変わらないわけで。これを、「ない」ことにフォーカスするのではなく、「ある」ことにフォーカスしたらどうなるか？と考え出したら、とまらなくなってしまうわけです。例えば、視覚以外の他の感覚がよく発達しているという方向性で、「聴覚達者」とか「触覚敏感者」とか、「音覚者」とか。心の目で見ているという意味で「心眼者」とか、イメージする人という意味で「想像者」なんていうと、まるで創造主。ジーザスクライストみたいで妙だよな…など、思考が脱線していきまして。。

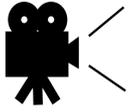
「いや、でも、そんな言われ方をしたら、聴覚や触覚がものすごく発達している人にならずにちゃいけないみたいで、イヤだよー」とか、「心の目で何でも見える超能力者みたいに思われても困るよー。」という、正直な視覚障がい者のみなさんの顔が目に浮かびます。でも、「晴眼者」とか「健常者」と呼ばれている、わたしたちのことを考えてみると、その辺の感覚がすごく鈍っていたんじゃないかと思うわけです。「わたしの目は晴れている。」とはとても言えないし、「常に健やかな人だ」なんて言われたら、そんなのともでもないわけで、そんな言われ方したら、困ってしまうはずなのに、この言葉を無自覚に受け入れているんですよね。「晴眼者」なんて言われている以上、しっかり物を見る目を養わなくては！とも思っていなかったし、「健常者」と呼ばれるからには、常に健やかな人でいなければ！と、気を張っていたわけでもありません。それに、そんな言われ方したら困る！とすら、自覚していなかったわけで。人間は、マジョリティに属して、「晴れる」とか「健やか」とか「常」なんて、ポジティブなイメージを自分に当てられていると、本当にそうかは別として、無自覚かつ簡単に、それを受け入れてしまうものなのかもしれないな…と。

でも、だとしたら、「聴覚達者」や「心眼者」という言い方も、アリなのではなからうか。と思ったわけです。「言葉の魔力」を逆手にとって、180度変えて使い続けてみたら、世間の見方も、自身の捉え方も、180度変わって面白くなりはないかと。つまり、「～がない」という見方から、「～がある」という尊重の眼差しへ。真実はさておき「言葉の魔力」は侮れない。と思ったわけです。

逆に長年、「晴眼者」「健常者」と呼ばれ続けて、無自覚に受け入れていた自分たちへの呼び方も、180度変えてみるとどうなるか？漢字の意味だけ180度変えると、「晴眼者」は、曇った目で「曇眼者」。「健常者」は、まれに病気になる人で「病希者」となるわけ

ですが、なかなか言いえているような気もするけれど、もともとの言葉によほど無理があるせいか、なんとなくしっくりきませんね。

「五体満足、常に健康」の物質的・肉体的な幸福神話を基準にして、「ない」ものはどれ？ 欠けているものは何？ とフォーカスするより、その神話から自由になって、自分や他人に「ある」こと、「ある」かもしれない可能性、見えないものにフォーカスする。その方が、みんな幸せになれる気がします。そこからはじめて、互いの尊重や対等な関係も、生まれてくるのではなからうか。。などと、物思いにふけていたのですが。。やっぱり、一番いいのは、「～者」なんて、カテゴライズされた「言葉の魔力」に囚われず、いろいろな長所と短所を持ち合わせた世界にたった一人のあなたとわたしを、名前や愛称で呼び合う関係が一番いいですよ。



活動報告

このコーナーでは、近日(7~9月まで)に開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- ・7/1 『幸せへのキセキ』 ユナイテッドシネマ 浦和
- ・7/9 『キリマンジャロの雪』 岩波ホール
- ・8/18 『おおかみこどもの雨と雪』 ユナイテッドシネマ としまえん
- ・9/2 『カンタ！ティモール』 バリアフリー上映会 立教大学 池袋キャンパス
- ・9/15 したまちコメディ映画祭 オープニング上映 『東京てやんでい』 浅草公会堂
- ・9/23 『黒部の太陽』 川崎チネチッタ



同行鑑賞会の中から

おおかみこどもの雨と雪



シティ・ライツ新宿チーム やまかな こと山幸 加奈(やまゆき かな)です。

「おおかみこどもの雨と雪」音声ガイドを担当させて頂きました！今回、初めて映画全編一人で音声ガイドをつけました。なので、苦労したところはたくさんあります。まずは、この映画はセリフのない風景描写や映像描写でストーリーが転回していくシーンが多い事。映像がBGMに合わせてコロコロ変わっていきます。

たとえば、ハナと雨と雪が雪山で遊んでいるシーン。音楽に合わせて雨と雪が宙返りをしたり、木の間を駆け抜けたります。そのリズム感を伝えたいなあって思ってガイドのタイミングを気をつけました。このシーンは苦労したシーンではありませんでしたが、ガイドをいれて一番楽しかったシーンでもあります。あと、綺麗な風景がたくさん出てくるのもとうまい表現で皆さんにお伝え出来たらと思って練習しましたが、やはりいい表現が見つからず…ただシンプルな表現でしか伝えられませんでした。自分が感動したきれいなモノを言葉で表現する事は、今後の大きな課題です。あと、ガイド中に登場人物の名前を間違えるという一番お客様を混乱させてしまうミスをしてしまったので、次回は絶対にやらないように課題にしたいと思います。

上映を終えて、お客様皆さんが拍手で迎えてくれて本当にやってよかったなと思いました。不慣れな音声ガイドでわかりづらいところが多々あったと思いますが、皆さんが優しくアドバイスをしてくださったので、これからも素敵な作品をたくさんガイドしていきたいです！





総会のご報告

2012

今年は、City Lights映画祭が6月後半にずれ込んだこともあり、通常よりもだいぶ遅れて、去る、8月4日に、2012年度の総会を行いました。総会に出席できなかった方も多くいらっしゃいましたので、この場を借りて、簡単に2011年度の活動報告と、2012年度の活動計画、並びに決算・予算をお知らせしたいと思います。

●2011年度の主な活動報告

シアター同行鑑賞会は…

個人企画：22回。チーム企画：4回。バリアフリー映画をみんなで観に行く鑑賞会：5回

岩波ホール上映会：6回。DVD体験会：5回。プロレス観戦や観劇会などの映画以外のイベント6回と、

トータルで47回の鑑賞会等のイベントを実施しました。

音声ガイドづくりと上映会協力

音声ガイド勉強会は、昨年2月～4月に股がり、震災の影響で在宅制作となった「蝶の舌」「大誘拐」の勉強会をのぞいて、

「英国王のスピーチ」「ゴースト」「奇跡」を課題に、3回の勉強会を行いました。その他、在宅制作は16本。

上映会協力は、「幸せの太鼓を響かせて」の全国バリアフリー上映があり、福岡・熊本・仙台・松本への出張もありましたが、その他には30箇所、地域社協や市民映画祭、自主上映などで音声ガイドに協力しました。

●2012年度の活動について

まず、シティライツのメインの活動は…

視覚障害者と晴眼者が、映画を「観ること」「味わうこと」。ガイドやイベントを「創ること」を通じて、生きる「喜び」や「楽しみ」を共にする活動とする。

そして、サブ的な活動として…

・地域交流に重きをおいたバリアフリー上映を、全国的に広げていくABCネットの活動。

・講習会や外部イベントへの協力など、音声ガイドの認知を広げる活動。

・「DVD」「テレビ番組」などの視覚障害者の生活ニーズに応える情報サポート活動。

を行っていきたいと思います。そして、これらの活動を、「あわてず急がず、1つ1つを“大切に”」をモットーに、取り組んでいきたいと思っています。

ボランティア募集の改善をはかります。

従来は、ボランティア登録は晴眼者のみで、「ボランティア通信」というメルマガを通じて、サポーターや誘導ボランティアを募集していましたが、応募がとても少ないです。これをメルマガ形式ではなく、メーリングリスト形式に変更し、ボランティアをしたい視覚障がい者も参加する形で、もっと細かくいろいろなボランティア募集を行って、ノウハウや意見の交換を、双方向で行っていきたいと思います。

また、鑑賞会の企画についても、このMLを活用し、個人やチームによる自主企画だけでなく、新しい人も参加しやすいように、事

事務局が音頭をとりながら進めていく「促し企画」も実施していきます。(※エリア別チームの運営については、班長を召集し、継続意思を確認・検討します。)

また、視覚障がい者やボランティア同士がお互いよく知り合うために、毎月第4土曜日、定期交流会を行っていききたいと思います。

□主な活動計画

- ・シアター同行鑑賞会… 開催目標は、個人企画 年24回／チーム・促し企画 年6回
- ・上映会協力… 年間20回ほどを想定。可能な限り、依頼に応じていきます。
- ・音声ガイドづくり… 音声ガイド勉強会は4回。岩波ホール上映会は在宅制作で6回。その他、在宅制作は5本を予定。

<ガイド制作者育成プラン>

ガイド勉強会経験者で、やる気のある人に視覚障害者のリクエスト作品や自分の好きな作品を制作・発表していく機会を作りたいと思います。

●2011年決算・2012年予算

| 収入の部 | 項目 | 2011年度実績 | 2012年度予算の順 | 支出の部 | 項目 | 2011年度実績 | 2012年度予算の順 |
|------|-----------|-----------|------------|------|-----------|-----------|------------|
| A | 会費 | 552,000 | 540,000 | H | 団体運営費 | 648,149 | 543,500 |
| B | 寄付 | 657,425 | 830,000 | I | 活動費 | 567,467 | 702,140 |
| C | その他 | 287,871 | 404,000 | J | 音声ガイド制作費 | 444,733 | 455,000 |
| D | 制作関連 | 207,795 | 207,795 | K | 上映会協力費 | 830,918 | 150,000 |
| E | 上映会協力 | 1,165,250 | 320,000 | L | 日点・ABCネット | 438,558 | 449,800 |
| F | 日点・ABCネット | 1,500,000 | 0 | N | 積立金 | 1,000,000 | 1,000,000 |
| | 収入小計 | 4,370,341 | 2,301,795 | | 支出小計 | 3,929,825 | 3,300,440 |
| | 前年度繰越 | 574,968 | 1,015,484 | | 次年度繰越 | 1,015,484 | 16,839 |
| | 収入合計 | 4,945,309 | 3,317,279 | | 支出合計 | 4,945,309 | 3,317,279 |

CINEMA×BAR

隠れ家的劇場

～ザ・グリソムギャングについて～

CLCC に定期的に登場する、劇場ザ・グリソムギャング。まだ行ったことのない方も多いと思います。今回は、この隠れ家的映画館、ザ・グリソムギャングについて紹介いたします。

『ザ・グリソムギャングって、どんなところ？』

小田急線の読売ランド前駅より徒歩7～8分、遊園地のよみうりランドに向かう坂道の途中に、世界初のシネマ+バーこと『ザ・グリソムギャング』があります。

そこは、座席数21のミニシアターと、小さなバーが隣接していて、毎週末に予約制の上映会が開催され、上映終了後は、映画を愛する人たちが酒を飲みながら映画について語り合う…。バーの店内には壁から天井に到るまで映画のチラシやポスターで埋め尽くされ、窓際にはバルタン星人やゴモラ、キング・ジョーなどの怪獣のフィギアや、エイリアンにダースベイダーのマスク

まで並んでいる。

まさに、映画マニアの隠れ家的存在の劇場です。

昨年12月を皮切りに、この劇場で副音声付き上映会を始めました。

この会報が届く10月には、早くも第10回目の副音声付き上映会も予定されています。

ここを紹介してくれたのは、私の小中学校時代の同級生で、『ウルトラマン・マックス』等の脚本家である金子二郎くんでした。

聞けば、12月に上映を予定している『ロスト・アイズ』という作品が、視覚障害者の女性をヒロインとしたホラー映画で、上映後には『盲目のヒーロー&ヒロインを語ろう』というトークショーも開催すると言う。

そこで、ライブ音声ガイドとトークショーのゲストを兼ねて、私にお呼びが掛かったのです。

音声ガイドをする映写室は、タミ三畳ほどの狭い部屋に35ミリ映写機が二台。

支配人の箕輪さんが自らフィルムを掛けかえながら上映します。

私はその部屋の片隅から、窓越しにスクリーンを見ながら解説。

洋画の上映では、字幕朗読もすべて一人きりでこなします。

邦画の上映会では、監督を招いてのトークショーと、監督さんも交えての『飲み放題付き』懇親会も開催しました。

生ビールやカクテルを片手に、ご機嫌な映画トーク三昧。毎回、最高に楽しい一時を楽しんでいます。

○箕輪支配人の言葉

「近頃は、見えていても心が曇っている客が多いのに、シティライツの皆さんは、心から映画を楽しんでくれて嬉しい。毎週、副音声付きにしたいくらい」

実は、シティライツの夢は、小さなバリアフリー映画館を持つこと。その劇場には、小さなお店も隣接していて、映画鑑賞後にお茶会などが開催できる。そんな理想の劇場のモデルとも言えるスペースが、ザ・グリソムギャングなのです。

皆さんも、是非一度、足をお運びくださいませ！

次回は、10月21日(日)『第九軍団のワシ』上映会。ほか年内にあと5回を予定しています。

ザ・グリソムギャングHP <http://grissomgang.web.fc2.com/>



特集

映画祭をめぐる

～心のなかに、熱いものあるだろ～

何回目か忘れてました。今回はちょっとマイナーです。2つほど取り上げてみました。自分もまったく知りませんでした。

<概要>(ウィキペディアより)

○シネリンピック！

2009年8月2日(日本時間)に横浜市西区みなとみらいのブリリア ショートショートシアターとアメリカ合衆国のロス・アンゼルスで第1回が開催された日米同時刻開催型の映画祭。日本とアメリカの両劇場で全く同時にスタートされ、短編映画による5ジャンル(ホラー／サスペンス、コメディ／アクション、アニメーション、ラブロマンス、ドラマ／ヒューマン)の種目で各国の代表作品同士が争った。

【歴史】シネリンピック！は2008年にアメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルス郡の日本人留学生達によるイベント運営団体「B.E Organization」により企画され、その後2009年初旬にコスモボックス株式会社が参加し、正式に共同主催する事となった。

○非同盟および発展途上国の平壤映画祭

北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の平壤で、1987年に開催されて以来、ほぼ隔年で9月に開催される映画祭。「自主・平和・親善」の理念のもと、非同盟運動の強化発展と世界の進歩的映画人の親善団結を図ることをその目的としている。最高賞は「たいまつ」金賞。

【歴史】第8回非同盟諸国首脳会議(1986年9月、ジンバブエ)で、加盟国間の親善・文化交流のため、平壤での定期的開催を申し入れたことを契機として開催が決定され、非同盟運動史上、初めて催された。

○ジェラルメ国際ファンタスティカ映画祭

フランスで開催されるファンタジー・スリラー・ホラー専門の国際映画祭である。1993年に終了したアヴォリアッツ国際ファンタスティック映画祭が前身となり1994年から開催。1996年からはフランスのジェラルメで毎年1月の終わりから2月の始めにかけて開かれている。2003年には日本人で初めて中田秀夫の『仄暗い水の底から』がグランプリを受賞した。

グランプリ受賞歴 (少し省略しています)

1995年 乙女の祈り(ピーター・ジャクソン、ニュージーランド)

1997年 スクリーム(ロバート・ゼメキス、リチャード・ドナー、ウォルター・ヒル、アメリカ)

1999年 CUBE(ヴィンチェンゾ・ナタリ、カナダ)

2000年 エコーズ(デヴィッド・コープ、アメリカ)

2003年 仄暗い水の底から(中田秀夫、日本)

2004年 筆筈(キム・ジウン、韓国)

2008年 永遠のこどもたち(J・A・パヨナ、スペイン/メキシコ)

2009年 ぼくのエリ 200歳の少女(トーマス・アルフレッドソン、スウェーデン)



一思い出は、名画とともにいつまでも一。

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介していきたいと思っています。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵な名画の数々をエピソードとともにお寄せ下さい！！

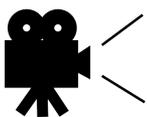
『思い出の映画』

<Ginko>

映画が終わるとヒロインになったつもりで、顔を上げ、胸を張ってスカートの裾を翻して、映画館から出てきたのはいつ頃までだったでしょうか。歳のせいか最近そういう気持ちがなくなったのです。そこで可愛げのなくなった私の「思い出の映画」をご紹介します。

映画の思い出といえば、尾籠な話で恐縮ですが、3才の頃の映画館のトイレの思い出です。妹を妊娠中で、暇な母とお供の叔母に連れられて、しばしば近所の日比谷映画街に出かけました。つまらない私は「おしっこ」を連発して、動かない母の代わりに叔母に抱かれる嬉しさに、嘘をついて困らせました。幼児でもそんな度々出るものではありません。丸出しのお尻を叩かれた懐かしい思い出があります。妹が生まれて忙しくなったのか、映画館の記憶が飛び、次の映画の場面という、小学校の校外授業の『原爆の子』です。多くの人がやけどを負い、女子供の死にゆく悲惨な場面は、今日まで私の心に恐怖の二文字を植え付けました。ですから、怖い映画は一切見ないようにしています。ところが、この原稿のために怖いもの見たさにビデオを取り寄せ、60年ぶりに見たところ、その場面は2分にも満たないもので、残り94分は何も覚えていないので初見でした。私にとっては、全く教育効果の上がない無駄な授業でした。

次に記憶にあるのが、『旅愁』で、6年生の時です。その叔母がひとりで行きたくないものだから、私が今度はお供です。全くつまらないのに、隣を見れば叔母がずっと泣いています。キスばかりしているのに一当時はキスにも関心がなく、なんでこんな映画に泣くの？と思いました。思えば叔母は独身のアラサーだったのです。後年になって何かの時に見る機会があり、理解できました。彼女は幸い結婚できましたが、認知症になった今、『旅愁』を見せたら、やっぱり泣くだろうかと、ふと、DVDを持って訪ねたくくなりました。



お知らせ

■新規会員のご紹介

(2012年7月1日～2012年9月31日までにご入会いただいた方々です。)

[正会員]・山崎 富啓(東京都練馬区在住)・小泉文雄(埼玉県戸田市在住)

■第25回東京国際映画祭 音声ガイド付き上映

昨年に引き続き、今年も東京国際映画祭の一企画として、バリアフリー映画の取り組みが紹介されます。今年5月に100歳で逝去された新藤兼人監督の代表作「裸の島」のはじめてのバリアフリー版上映と、バリアフリー映画に関するシンポジウムが行われるそうです。

「裸の島」上映会 & シンポジウム

10月25日(木)15時開場 COREDO室町・日本橋三井ホール

1:新藤兼人監督作品「裸の島」日本語字幕&音声ガイド付上映会

瀬戸内海に浮かぶ不毛の孤島を舞台に、自然と人間の闘いを抒情で描いた無言の映画詩。1961年のモスクワ国際映画祭グランプリ受賞をはじめ、数々の国際映画祭で受賞、世界60か国以上で公開された不朽の名作。

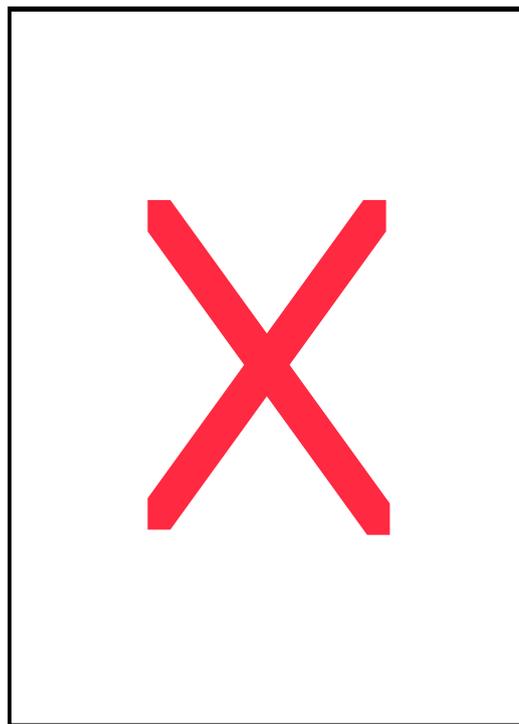
★『裸の島』はセリフのない映画ですが、ストーリー進行をわかりやすくするために、シーンごとに男女で副音声を交代するフランスの方式を使った、日本ではじめての試みを体験できます。また、作品にとって重要なセリフ以外の自然の音や環境音、そして音楽などの情報は、聴覚障害者用にわかりやすく字幕で伝えられます。

2:シンポジウム「バリアフリー映画をスタンダードに」

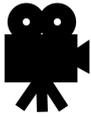
映画は、みんなで集まり、みんなと一緒に楽しむことのできる娯楽です。障害のある人たちにとっても、高齢者にとっても、また健常者にとっても、「バリア=壁」を感じることなく、みんなと一緒に映画を鑑賞できる環境を広げていきたいと考えています。バリアフリー映画の普及は、福祉の枠を越えて、文化や教育を含めた私たちの暮らし全体を豊かにするものと確信しています。

★シンポジウムでは、昨年に引き続き、「バリアフリーは映画の未来」という視点で、バリアフリー映画の新しい可能性や面白さについて語ります。新藤兼人監督のプロデューサー・新藤次郎さん、「バリアフリーさが映画祭」を主催している古川康佐賀県知事、東京大学・先端科学技術研究センターの特任研究員で視覚障害者である大河内直之さんの3人に、MASCのスタッフであり「虹とねいろプロジェクト」の松田高加子さんが司会を務めます。

* 手話通訳・文字通訳 有り



※お申し込み方法については、追ってメーリングリスト等でお知らせし致します。



編集後記

編集スタッフ、校正係や音訳スタッフも大募集！
希望の方は会報編集課まで！

(会報編集課 ノンちゃん)

先日、ラジオを聞いていたらこんな本が紹介されていました。

『世界中が夕焼け 穂村弘の短歌の秘密』新序舎、2012年6月発行。内容紹介：思いは時を超えて、響き続ける一。穂村弘の「共感と驚異の短歌ワールド」を、新鋭歌人・山田航が解き明かし、穂村弘が応えて語る。短歌120首と山田の評、穂村自身のコメントを収録。

とある番組の中で新序舎の編集者の方がいろいろな本を紹介するコーナーで取り上げられていて面白そうだなあと思いました。短歌というのは当たり前ながら短いので厳選された言葉でつづられるわけです。なので、それを読む人によって感じるところが少しずつ違ってくる。第三者が加えた解釈に対して、作者が「なるほど、それは面白い解釈だ」と受けているそうなのです。このやり取りの仕方がなんともいいと思いませんか？一つの作品に対して自由に解釈を加えて楽しみ、作者もそれを面白がって受け入れつつ、実はこういうつもりで作ったんだよという風に応える。

私たちが映画を観るときも、観る人やそのときの心境などで様々な印象が生まれます。それを違うからこそ面白いと盛り上げられる場があること。さらに作り手の方ともお話できることがあれば、これほどの贅沢はないですよね。そんな意味で、ほんのときどき訪れる、監督のティーチインなどを聞ける機会を楽しみにしている私です。

(会報編集課 吉川)

みなさんこんにちは。早いもので、もう10月です。「早いもので」って今年が特別に早いわけではないと思うのですが、毎年使っているのでとりあえず今回も使ってみました。

話は変わりますが、自分2年前からクーリエジャポンという雑誌を定期購読しています。月刊誌で、世界の記事を寄せ集めて一冊にしたものです。読むだけではなく、読書会(「クーリエジャポンで朝食会」というイベント)にも参加しています。発行されて2週間後くらいに集まってディスカッションして、理解を深めようという活動で、気になった記事を一人一人上げていって、自分の考えをアウトプットするというものです。

毎回興味深い記事が載っていて面白いのですが、10月号は「アジアで働く日本人」についての記事でした。中国・台湾・タイやインドネシアなど、成長著しいところで働く日本人についてのレポートです。この記事が読書会で話題に上がり、もし「アジアで働くチャンスがあったら行きたいか？」という話になりました。参加者の意見はというと……、9割の人が「行きたい」。独身者はもちろん、結婚している人も「できれば行きたい」と。自分も「チャンスがあれば行きたい」派です。人生の中で一番学べる時期に、学べる環境に身をおきたいとは思っています。皆さんの意見はどうでしょうか？

お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。

皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は1月10日。投稿される方は、12月第2土曜日までをお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2012年秋号 10月10日発行 編集：吉川俊平、斉藤恵子、石坂春香
発行者：バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ
事務局：〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995
E-mail mail@citylights01.org URL <http://www.citylights01.org>

